

〈ICT教育：高等学校 英語〉

「書く」活動における自己調整場面を観察する取組 ——ハイブリッド型ポートフォリオを活用した自律的学習への工夫——

沖縄県立知念高等学校教諭 神 山 若 夏

I テーマ設定の理由

新学習指導要領では育成を目指す資質・能力が三つの柱に沿って整理され、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点でのバランスの取れた学習状況評価が求められている。各高等学校において評価の3観点を踏まえた指導計画、授業改善に向けて研究、協議が進められており、現任校（以下本校）においても従来の考査に加え定期的なパフォーマンステストに取り組み、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価方法や手立てについては、教科全体である程度の見通しを共有することができている。しかし「主体的に学習に取り組む態度」の観点における評価方法については、目に見えないものを見取るという難しさから具体的な方法が共有されていない。生徒一人一人の自律的な学習への取組をどのように見取るのか研究を深める必要がある。「主体的に学習に取り組む態度」の観点には知識及び技能を習得したり、思考力・判断力・表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、その粘り強い取組を行う中で自らの学習を調整しようとする側面があるが、これまでの自分の実践を振り返ると授業内で生徒の学習が完結しており、授業後、単元後に生徒が学習を深めようとする機会を設定していない。生徒が自分の課題を見つけ、自分の学びに取り組めるよう意識した授業づくりが必要である。

文部科学省実施「平成29年度英語教育改善のための英語力調査」では高校3年生の英語力を Common European Framework of Reference for Languages（以下 CEFR）に照らし、4技能に分け分析している。その結果によると「書くこと」は CEFR の A2 レベルに達している割合が 19.7%、「話すこと」が 12.9%と「読むこと」（33.5%）「聞くこと」（33.6%）に比べて低く、発信力育成への更なる指導の工夫が求められる。前年度のパフォーマンステストはすべて「話すこと」を重点領域として設定しており、「書くこと」はその原稿づくりとして取り組んできた。発表の時間確保も必要なため生徒が自分の考えを英語で書く時の学習課題と向き合う時間を十分に確保できたとは言えず、本研究では、英語の4技能の中の書く活動に焦点を絞る。

主体的に学習に取り組む態度を見取るための手立てとして有効だと提唱されているのがポートフォリオである。ポートフォリオは生徒の学びを記録し、その変容を教師と共有することができる。進学や就職の際に利用されるイメージが強いが、本来ポートフォリオは指導経過の中で「主体的な学び」に生徒自身が活用するものであり、自分の学びを蓄積し、いつでも振り返ることができ、生徒自身が学習成果を自覚化することを支援するツールである。「Classi ポートフォリオ」や「まなBOX」といったデジタルポートフォリオサービスがあるが、有償のためすべての学校で利用できる状況ではない。評価への取組は汎用性が求められるため全県的に導入された Microsoft 365 の OneNote Class Notebook（以下 Class Notebook）を活用し、ポートフォリオを作成することにした。ポートフォリオ作成には労力と時間がかかる印象があるが、Answer Box Creator Zを用いることで紙ベースの活動をデジタル化することで効率的に作成できる。そのためハイブリッド型として表し「主体的に学習に取り組む態度」の学習支援ツール及び評価ツールとして提示したいと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「書く」活動においてワークシートと ICT を用いたハイブリッド型ポートフォリオを活用し生徒の学習行動を体系的に可視化することによって、各生徒の自己調整場面を効果的に観察することができ、同時に自律的学習を支援することができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 理論研究

(1) 自己調整力とは

自己調整力は「学びに向かう力」として育成を目指す重要な力である。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の報告書（2019）では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する際には「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうか」という意思的な側面を評価することが重要である」としている。

この自らの学習を調整しようとする力を育成する取り組みは、これまでも「自己教育力」や「自律的学習」といったキーワードをもとに研究されているが、本研究では「自己調整学習」の研究を軸として学習指導の過程を構築する。

自己調整学習(Self-Regulated Learning) は1980年代後半に広がりを見せたバリー・J・ジーマンが起点となる教育心理学理論であり、「受け身で機械的な学習者像から、主体としての学習者の役割への変換」をもたらした理論として日本心理学会第59回総会発表論文集（2017）に記されている。日本では2006年に研究会が設立され、「自らの学習を調整しようとする側面」に対する研究として注目されている。

自己調整学習の研究者である伊藤崇達（2020）はジーマンの研究をもとに、自己調整プロセスを「予見」「遂行コントロール」「自己省察」の3段階に分けている。このプロセスは循環的、螺旋的なもので、この循環を何度も回すことで自己調整学者（＝スマート・ラーナー、賢い学習者）になっていくのだと解説している（図1）。

自己調整学習スキルは「観察」「模倣」「自己コントロール」段階を経て、「自己調整状態」へと発達するとされている。学習者が他者の行動を観察し、他者から支援を得た模倣行動の体験をすることで類似の課題に対して自分の力で学習方略や技術を利用できるようになる。この学習を繰り返し体験することで、他者に頼らない学習者へと成長していく。本研究では思考力・判断力・表現力の伸長を目的としたパフォーマンス課題を設定し、自己調整スキルの発達段階を意識した指導計画を立て、各段階での振り返り活動とその観察方法について検証を行う。

(2) 英語教育とポートフォリオについて

峯石緑（2010）によると、ポートフォリオには作業ポートフォリオ（working portfolio）、展示ポートフォリオ（display, showcase, or best works portfolio）、評価ポートフォリオ（assessment portfolio）の3つに分類される。作業ポートフォリオの主な目的は、学習資料の保管で、特定のトピックに関連した学習資料を学習者自身が保管するために使用する。展示ポートフォリオは各学習者の自己最高傑作を収めたポートフォリオで、評価ポートフォリオではそのカリキュラムにおいて「学習者が何を学んだか」を記録する。私のこれまでの学習指導の中では、各時間のワークシートを綴ったファイルが作業ポートフォリオであるが、その中に評価ポートフォリオが混在していたことになる。英語では語句や文法の習得や読解のための問い、リスニングなど多様な活動がある。受け持ちの生徒のファイルを思い起こしても、彼らがその中にある自分が書いた英作文を探し出し、見返すことは容易ではない。「書く」活動のみをまとめた作業ポートフォリオと、自分の学びの状況を認知するための評価ポートフォリオ両方を生徒自身が作成することが重要で、次の学びへとつながるものとなる。ポートフォリオの有効性を理解している一方で、生徒、教師ともにかかる時間的負担を感じ敬遠してきた。しかし

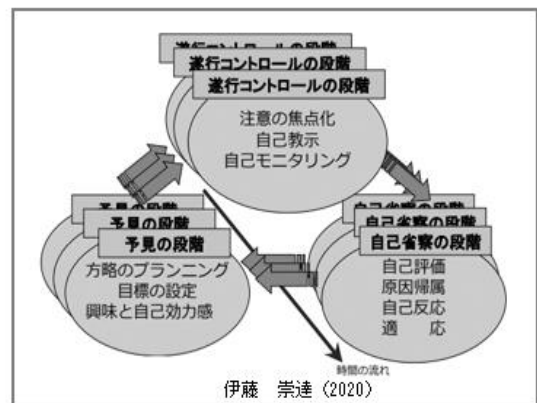


図1 自己調整の循環的・螺旋的なサイクル

ICTを活用することで、その負担を軽減し容易に作成することができれば単元、年度を超えた長期的な振り返りと学習支援が可能になると考え、OneNote Class Notebook にポートフォリオの作成に取り組む。

(3) 外国語における「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法と課題

『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 高等学校 外国語（以下学習評価に関する参考資料 2021 年）によると外国語における「主体的に学習に取り組む態度」の評価は「思考・判断・表現」の評価と一体的にパフォーマンステスト等で行う評価と、生徒が自己の学習を調整しようとする状況の観察に基づく評価がある。各パフォーマンス課題では「話すこと（発表）」、「話すこと（やり取り）」、「書くこと」の中から重点領域が設定されており、その領域ごとに自己調整に対する評価を記録し、年間を通して総括的評価を行う。

「学習評価に関する資料」において自己調整の評価資料として提唱されているのが、「日頃の授業での言語活動への取組や、振り返りシートなどの記述が実際に活動への取組に表れている様子を教師が観察」することで、教師にはパフォーマンス課題を設定し、学習支援と同時に生徒の取組を観察し、記録することが求められる。しかし授業中の活動の観察には限界があり、生徒一人一人を公平に見ることは難しい。本研究では自己調整できている状態を「生徒個人が自覚した学習課題に対し課題解決のための具体的行動をしている状態」と定義し観察を行う。生徒の学習行動を可視化し複数の視点で多面的に見取ることが大切であると考え、本研究では Record of My Study（＝振り返りシート。以下評価シート RoMS^{注 i}と表記）に加え、Class Notebook で作成する作業ポートフォリオを複合的に見ることで、課題解決行動の実施状況を観察する。

2 自己調整を観察するためのツールについて

本研究では紙ベースでの学習内容と学習評価をデジタルで記録する。これをハイブリッド型ポートフォリオと呼ぶ。自己調整への観察ツールとして紙ベースの評価シート RoMS とその紙面情報をデジタル化するために Answer Box Creator Z（以下ABC-Z）、作業ポートフォリオ作成のために Class Notebook、学習状況の観察に Insights を用いた（図 2）。

(1) 評価シート RoMS のデザイン

「学習評価に関する参考資料」（2021 年）に記載されている振り返りシートのポイントをまとめると表 1 のようになる。このポイントを押さえ、本研究における評価シート RoMS をデザインし ABC-Z を用いてデジタル化する。

① 単元の開始時 [STEP1]

単元の開始時 [STEP1] で生徒が抱える学習課題の記述は、内容と英語表現に分け実施した。今回の課題は衣料

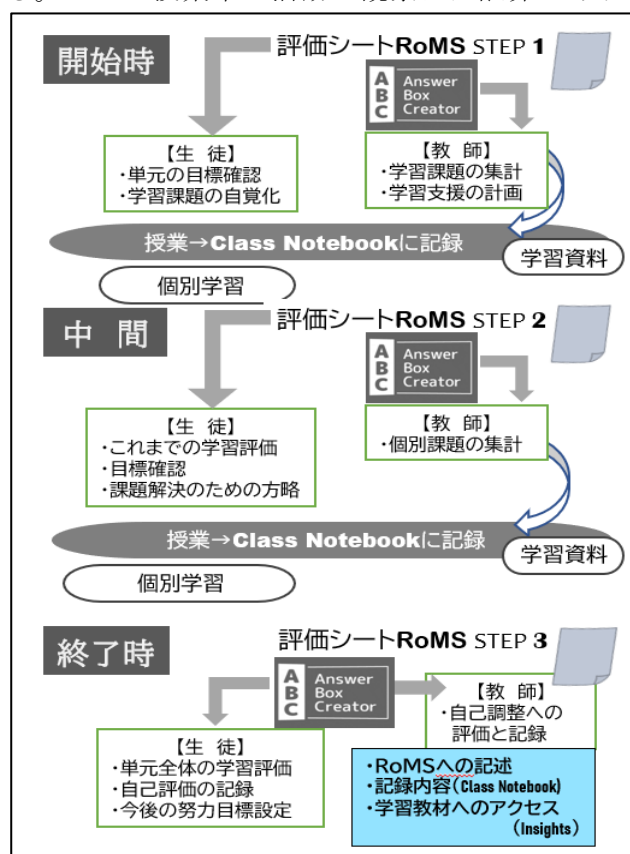


図 2 本研究における学習の流れ

表 1 振り返りシートのポイント

- ・重点的に指導した領域についての振り返り
 - ・単元を通して1枚の振り返りシートを使用
 - ・選択肢を用いて単純化も可能
 - ・単元の開始時[STEP 1]、途中[STEP 2]、終了時[STEP 3]のそれぞれの段階で記述
- 『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料
高等学校 外国語」を参考に作成

ゴミ問題の解決方法の提案というテーマを設定しているため、社会問題について調べ考える活動が必要となる。さらに生徒にとっては学習内容を英語で表現するという壁があり、単元開始時は目標の提示と、目標達成のために具体的にどのようなことに取り組むのか、内容と英語表現に分けて問う構成にした。単元開始時の各生徒の課題は指導に活かす資料とするため、選択肢を与えA B C—Zを用いて集計し学習支援の内容や、時間配分を考える参考とした（図3）。各課題解決のための学習資料を作成し授業を行った後、各自が授業後にアクセスできるようClass Notebookに記録した。

② 単元の途中 [STEP2]

衣料ゴミの問題について各自が調べ、「深刻さ」や「関心を引く」ためのアイデアの共有、段落構成について、シンプルな英語表現方法の学習を終えた後に中間の振り返りを実施した。内容面に関する理解の深化と英語表現に対する課題を確認し、今後取り組むことについて記述する構成になっている。また、ルーブリックに照らしながら、予想目標を考えることで、目標の明確化と学習課題の自覚化を図った。

③ 単元の終了時 [STEP3]

単元全体を通した自分の学習成果を確認し、次の書く活動に対しての学習課題と課題解決行動を明確にする構成になっている。単元全体で取り組んだ学習行動の評価、満足感の有無、次の学習への応用に関して選択肢で問う項目を入れ、学習への努力を記述する内容になっている（図4）。

(2) Answer Box Creator Zについて

A B C—ZはWord文書でデジタルテストを作成するツールで、本校では従来どおりの紙と鉛筆で回答したテストの採点や集計業務のデジタル化に活用し、業務の効率化へとつながっている。A B C—Zの魅力の一つが紙ベースでの活動のデジタル化が容易にできることにある。紙のワークシートを使用すれば、生徒の

図3 内容に関する評価シート RoMS [STEP1]

図4 単元終了時の評価シート RoMS [STEP3]

[STEP 1-1] 伝える内容面について		
[Goals]を達成するために、今不安なことはどんなことですか。回答はいくつ選んでも構いません。		
A: 衣料ごみの現状を知らない。	☐	☐
B: 衣料ごみを減らすアイデアが思い浮かばない。	☐	☐
C: 「深刻さ」をどう伝えればいいのかわからない。	☐	☐
D: どのように「関心」を引けばいいのかわからない。	☐	☐

ラベル	回答者数	回答比率
A: 衣料ごみの現状	24	89%
B: 衣料ごみを減らすアイデア	13	48%
C: 「深刻さ」の伝え方	6	22%
D: 「関心を引く」方法	11	41%

図5 A B C—Zを用いた学習課題の集計

書く活動が個々のタイピング力に影響されることがない。また翻訳機能に頼ることができないという制限を設けることができるため、自分の力で英文を書くという目標達成のために紙の使用は欠かせない。紙の記述内容をデジタルに記録するための重要なツールがA B C—Zであり、本研究では評価シート RoMS に記載される学習課題の集計（図5）と評価記録、生徒記述欄の画像化、そしてパフォーマンス課題の記録に用いた。

(3) OneNote Class Notebook について

県立高等学校ではMicrosoft Teams for Education が導入されており、本校でも昨年度よりオンライン授業や家庭学習で活用が増え、生徒も操作に慣れている。Class Notebook はこのEducation プランに備わっている機能で、このアプリにより Teams 上のクラスにノートブックを作成することができる。教師と生徒個人で共有する学生ノートブック、教師が教材を生徒と共有するコンテンツライブラリー、そしてクラス全員で共有や協働作業を行う共同作業スペースがある。見出し機能が充実しており、トピックによる分類も容易であることから、本研究ではClass Notebook で生徒の学習活動を可視化し、生徒個人の学びの記録に活用した。複数ページで作成された評価シート RoMS をまとめ、単元全体を通した学びの変容を認知するための評価ポートフォリオも同時に作成することができた。

(4) Insights について

Microsoft Teams にはA I を用いた Insights 機能があり、Teams 内の資料や課題への生徒のアクセス状況を確認することができ、本研究では生徒の支援資料へのアクセスや学習活動への取組を観察する。Insights での分析を見ることで学習の進捗状況を確認するだけでなく、学習過程を体系的にまとめ、評価シートやClass Notebook では観察できない生徒の努力を可視化することができる。生徒を評価すると同時に教師の学習支援方法や生徒への動機付けの適正を測るためにも有効である（図6）。

3 実態調査

検証授業実施前に英語の「書く」活動における関心、学習方法の実態を調査するため、知念高等学校2年生54名を対象にアンケートを行った。

実施した2クラス（Aクラス・Bクラス）は生徒の英語力レベルが大きく異なっている。Aクラス（27名）は国公立大学進学を目指す応用クラスの中でも習熟度上位に位置しており、英語学習に対して高い目標と向上心を持っている。一方Bクラス（27名）は英語を苦手とする生徒が多く、英語に対する自己評価も低いため本研究を通して変容を期待しているクラスである。2クラスを比較しながらBクラスの生徒を中心に分析を行う。

(1) アンケート調査の結果

Bクラスにおいて「英語を書く活動は好きですか」という質問に対して56%の生徒が「好き」「どちらかというとき好き」と答えている一方で「英語を書く活動は得意ですか」という質問に対しては「得意」だと答えた生徒は0%、「どちらかというとき得意」が18%であり、書く活動に対して多くの生徒が苦手意識を抱いている。英作文課題ではAクラス、Bクラスとも7割近くの生徒が提出前に友人や教師に添削依頼をしており、外部支援を活用して課題に取り組もうとしていることが読み取れる（表2）。



図6 Microsoft Teams Insights

また表 3 で示すように B クラスは、78%の生徒が英作文課題の時に、日本語の文を直接オンライン翻訳で英訳していることが多く、その主な理由として「ほとんどの文が英語で表現できないから」と答えている。彼らが自信をつけるためには基本的な英語表現の定着を図り、オンライン翻訳に頼らない学習習慣を身に付けることが重要となる。加えて過去の英作文の利用も改善目標

の一つである。昨年度各課題で使用した英語表現をまとめた「英作文ノート」を作り、パフォーマンス課題の際に参考できるよう保管するように伝えてきた。B クラスで 40%の生徒が「パフォーマンス課題時に昨年度のファイルを見返す」と答えたのは予測より多く、「英作文ノート」活用の可能性を感じたが、更に多くの生徒に、過去の英作文活動を通して表現の幅を広げられることを実感してもらうために、デジタルで保存できる Class Notebook を活用する。

(2) ライティング力分析

生徒の書く力を把握するために、前单元における生徒による英作文課題の分析を行った。新学習指導要領では英語コミュニケーションⅡにおける書く活動目標の中に「社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。」と示されており、書く活動では一定の支援を必要とし、即興的に文章を書くことは求められていない。検証授業と同じ課題で英作文を書かせ比較分析を行うことは、生徒の自信喪失、意欲の低下につながると判断し前单元での課題を用いて分析を行った。

課題は教科書本文の要約で、本文を学習した後、「ハロウィンに人々が何をするのか」という問いに対し四つの文章で表すことを目標とした。英文を書くことができれば各 1 点、文法ミスがなければ各 1 点を加点し評価を行った（図 7）。8 点満点を 100%として算出した平均得点率は、A クラスが 77%であるのに対し B クラスは 48%と低く、約過半数の生徒には三つ以上の文を書こうとしているものの、日本語の語順のまま単語を並べることが多く、主語と動詞の不一致や主語＋動詞＋目的語（第 3 文型）の理解度の低さが特徴として現れた。そのため本单元における書く活動では、B クラスの生徒に対して英語の語順について意識的に指導するとともに、評価シート RoMS においても英語の語順への意識化と理解を促すように構成した。

実態調査の結果を踏まえ本单元における技能面での目標を翻訳機能や教師、友人に頼らずに英語を書くこと、過去の英文や教科書の文を活用した文量の増加に定めて学習支援を計画した。

表 2 書く活動に対する調査結果

	A クラス	B クラス
英語を書く活動が好きだ、どちらかというと好きだ	82%	56%
英語を書く活動が得意だ、どちらかというと得意だ	48%	18%
英作文課題での友人、教師への添削依頼	67%	67%

表 3 改善が望まれる学習行動

	A クラス	B クラス
英作文課題でオンライン翻訳機能をあまり使用しない	81%	22%
パフォーマンス課題時に昨年度のファイルを見返す	27%	40%

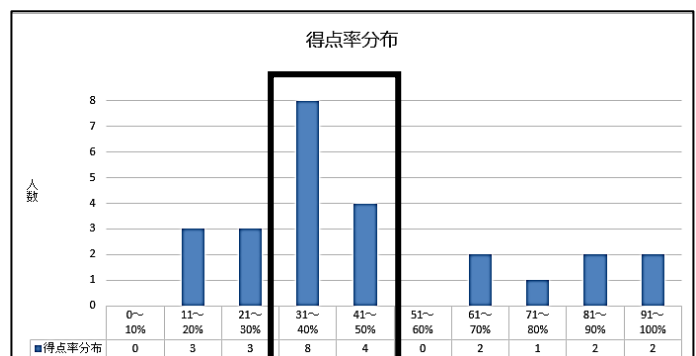


図 7 前单元ライティング課題得点率分布グラフ

Ⅲ 研究の実際

1 单元名 : Lesson 5 Changing Things, Changing Lives

(World Trek English Communication II 桐原書店)

2 単元目標

(1) 知識及び技能	(2) 思考力、判断力、表現力等	(3) 学びに向かう力、人間性等
言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる力。(英語コミュニケーションⅡ 2 内容 (1))	「聞くこと」「話すこと」を通して教材から得た情報を整理しながら自分の考えを形成し「書くこと」で表現する力。(英語コミュニケーションⅡ 2 内容 (2))	教材の背景にある文化に対する理解を深め、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度(外国語 第1款 目標(3))

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①【知識】 ごみ埋立地で生活する人々の心情を読み取り、ゴミの活用方法について書かれた文を読みその内容を理解している。	③本文の情報を整理し、参考にしながら、身近なゴミ問題について、その現状を英語で表現し、ゴミの活用方法について自分なりのアイデアを提案することができる。	④ゴミ問題について理解を深め、その現状や解決方法について英語で表現しようとしている。
②【技能】 ゴミ問題について現状を説明し、課題解決のアイデアを書くことができる。		【自己調整】 ⑤自己の学習成果と課題を自覚し、課題を解決しようと行動している。

4 単元の目標にせまる問い（パフォーマンス課題）

知念高校生が衣料ゴミ問題について深刻だと気付き関心を持ってもらえるように、衣料ゴミを減らすアイデアを提案するインフォグラフィックを作成する。 【条件】 ①衣料ゴミについて3つの情報を含むこと ②衣料ゴミを減らす具体的な提案をすること ③「深刻さ」「関心を引く」ための工夫を文章でもグラフィックでもすること
--

*パフォーマンス課題評価基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	語彙や表現の選択に優れ、理解しやすい英文を書いている。	衣料ゴミの問題について3つの情報を十分に(見出し+4文以上)で伝えており、「深刻さ」「関心を引く」ための工夫が効果的に書かれている。	衣料ゴミの問題について3つの情報を十分に(見出し+4文以上)で伝えており、「深刻さ」「関心を引く」ための工夫が効果的に書こうとしている。
b	誤りが一部あるが、理解に支障がない程度の英文を用いて書いている。	衣料ゴミのゴミについて3つの情報を伝えること(見出し+3文)ができている。	衣料ゴミのゴミについて3つの情報を伝えようと(見出し+3文)している。
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない

5 単元の指導計画

単元の総時間 (14 時間) 思考力・判断力・表現力の育成を重点とした授業(8時間)

学習活動の領域:「聞く」=L 「読む」=R 「話す(やりとり)」=I 「話す(発表)」=P 「書く」=W

*PT=パフォーマンス課題 *評価方法 CN=Class Notebook

時	☆本時の目標・学習活動	領域	ICT 活用 ◆生徒の使用	評価の観点と 評価方法
1 TT	☆ねらい: 単元目標、PT 内容確認 ・TT でのモデル学習、 <u>評価シート① 開始時</u>	L/R	PowerPoint ◆Canva / ABC-Z	○知②○主④ 評価シート RoMS
2-4	☆ねらい: 各 Part の語句、表現、要点理解	R/L/ P	PowerPoint	○知・技①② ワークシート確認

5	☆ゴミ問題の理解を深め、伝え方について考える ・情報収集 ・協働学習	L/I	PowerPoint ◆Class Notebook ABC-Z	○思○主④、○主⑤ ワークシート確認 CN, Insights
6	☆ゴミ問題について理解を深める、段落構成について考える ・情報収集 ・段落見出し作成 ・アイデアのシェアリング	L/I/ W	PowerPoint ◆Class Notebook	○思、○技② ○主④、○主⑤ ワークシート確認 CN, Insights
7	☆アウトラインを完成させる ・モデル学習 ・使用語句、表現の協働学習	L/I	PowerPoint ◆Class Notebook ◆Vortex ABC-Z	○技② ○思、主⑤ ワークシート確認
8	☆オンライン翻訳を使わずに英語で表現する ・定型表現の定着活動 ・文型学習 (SVO を中心に) ・ <u>評価シート② 中間</u>	L/S/ W	PowerPoint ◆Class Notebook ABC-Z	○技②、思 ○主④、⑤ ワークシート確認 RoMS CN, Insights
課題原稿提出(中間)				
9-11	☆各 Part の理解を深める ・文法学習、Re-telling 活動	R/L/ P	PowerPoint	○知・技①② 定期考査
12	休校によりオンライン授業 ☆学習成果の認知、表現力の向上 ・相互添削(実施中止) ・Grammarly を活用した自己添削 ・評価ポートフォリオのまとめ(実施延期)	L/W	PowerPoint ◆YouTube ◆Grammarly ◆Class Notebook	○主④ ○思、主⑤ CN, Insights
13	本時: ☆表現力の向上、モデルからの表現応用 ・単元の語句や表現の復習 ・教科書表現の応用	R/L/ P/W	PowerPoint ◆Quizlet ◆Class Notebook	○知①、主④ ○思、主⑤ CN, Insights 課題内容で確認
14	☆パフォーマンス課題完成 ・Canva を用いた Infographic 作成 ・評価ポートフォリオのまとめ ・ <u>評価シート③ 終了時</u>		PowerPoint ◆Class Notebook ◆Canva ABC-Z	○技②、思 ○主④、⑤ 課題内容で確認 Grammarly, RoMS

評価方法: ○指導に生かす評価 ○指導に生かすとともに記録して総括に用いる評価

その他の使用ICTツール

- *Canva:無料で利用可能なグラフィックデザインツール⇒Infographic 作成に使用
- *Vortex::www.classtools.com で提供されている分類ゲーム⇒語句をゲーム感覚で学習する
- *Quizlet::オンライン学習ツール⇒語句をゲーム感覚で学習する
- *Grammarly::オンライン自動添削ツール⇒英作文自己添削に使用

6 本時の展開

本時の目標

①表現力向上 ②教科書、過去の英作文からの表現応用

	学習活動・指導上の留意点	領域	ICT	評価規準・方法
導入 (15分)	【学習活動】 ①Chromebook ログイン ②Lesson 5 の語句や表現復習 (個人学習⇒ペア学習⇒グループ学習) 【指導上の留意点】 ・パフォーマンス課題と関連した語句のみを抜粋	L/P	Quizlet	○知①、主④ 活動観察

展開 (30 分)	【学習活動】 ③添削済の英文を Class Notebook へ転記 ④教科書、ファイルから今回の課題に応用できる表現を抜き出し、シェアリング ⑤全員で抜き出した表現を使って、課題に使えるように言い換えて発表(ペア活動:一人2文) ⑥原稿ページに書き足す 【指導上の留意点】 ・前時オンライン授業に参加できなかった生徒の状況確認と今後の対応を説明する。 ・④、⑤では説明だけではなく、モデルを示す。 ・教科書やファイルの表現を応用することで、文量が増え、評価に上がることを認識させる。	R W P W	CN ⇒コラボレーションスペース ⇒個人のページ	◎技②、思 CN 課題内容確認 ◎主④、⑤ CN Insights 課題内容確認
まとめ (5 分)	【学習活動】 ⑦提出までのスケジュール確認 【指導上の留意点】 ・翌日以降の自宅学習でも取り組むことを指示する。			

IV 仮説の検証

1 自己調整の観察におけるハイブリッドポートフォリオの有用性

本研究では自己調整できている状態を「生徒個人が自覚化した学習課題に対し課題解決のための具体的行動をしている状態」と定義しており「生徒個別の課題掌握」と「生徒一人一人の学習行動の観察」の2つのステップが必要となる。ICTを用いることでそれぞれの過程を効率的に実行することができた。

(1) 生徒個別の課題を掌握するためのABC-Z活用

単元中間の評価シート RoMS は選択式と記述回答形式で作成しており、紙媒体をスキャンし、ABC-Zで読み取ることで選択式回答はデータ化される。このアンケート集計ブックはExcelシートとしてデータ化されるため、関数や入力規則を用いて加工することが容易であり、記述回答の情報を付け加えることで表4の学習課題確認シートを短時間で作成することができる。今年度125名の

生徒の教科指導を担当しており、クラスごとのシンプルなリストを作成することは、その後の学習行動観察の効率化につながった。

表4 学習課題 個別シート

氏名	内容			英語表現			追加 (記述より)
生徒 A		深刻さ			語順	文法	段落構成
生徒 B	提案		関心	語句・表現		文法	
生徒 C			-	語句・表現			時間確保
生徒 D	提案	深刻さ	関心			文法	PC 操作

(2) 学習行動を観察するための Class Notebook 活用

Class Notebook には各学習課題を解決するヒントとなる学習資料を掲載した。例えば今回のパフォーマンス課題で使うことが予想される動詞のリストや、提案するための英語表現など授業後にワークシートのデータを複製し掲載した。授業だけではなく、授業以外の時間に各生徒が課題としている分野の資料へアクセスし、学習を深めているかについて、Insights を用いて確認することができた。例えば図8の生徒Bは授業やオンラインで実施された語句テスト以外にも教科書の音声ダウンロードし、動詞リストなど多くの学習資料へアクセスしており、自ら学習に取り組んでいる状況を確認することができる。



図 8 Insights より 日付ごとのアクセス量の表示

(3) 実際の評価

前述した生徒 B はパフォーマンス課題の評価では、3 観点すべてで b 評価となった。生徒 B は評価シート RoMS で、中間地点での課題を「深刻さを伝え方」「語順」「文法」だと記述している。Class Notebook での学習状況をみると「深刻さをどのように伝えるのか」というアイディアシェアリングページに積極的に発言を残し、「動詞リスト」「シンプルな英語表現」などさまざまな学習資料にアクセスしている。また Grammarly を使用し自己添削にも取り組み、パフォーマンス課題以外でも教科書の音声ファイルのダウンロードや文法課題に解答している様子を見取ることができた。この生徒はこの単元で学習に自分の課題を見つけ、その課題解決のための取り組みをしていると判断し、単元の評価では「主体的に学習に取り組む態度」を a とした（表 5）。

表 5 生徒 B の評価

パフォーマンス課題評価		単元の評価	
	知識・技能		主体的に学習に取り組む態度
b	誤りが一部あるが、理解に支障がない程度の英文を用いて書いている。	a	④ゴミ問題について理解を深め、その現状や解決方法について英語で表現しようとしている。
	思考・判断・表現		【自己調整】
b	衣料ゴミのゴミについて3つの情報を伝えること（見出し+3）ができています。		⑤自己の学習成果と課題を自覚し、課題を解決しようと行動している。
	主体的に学習に取り組む態度	(主体的に学習に取り組む態度のみ抜粋)	
b	衣料ゴミのゴミについて3つの情報を伝えようと（見出し+3文）している。		

Class Notebook の活用により個々の生徒の学習への工夫を視覚化することができ、評価シート、授業での観察に加え生徒の言語化能力や教師の目線に左右されない新しい指標を評価に用いることができた。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は年間を通して総括的に行うが、今年度「書くこと」を重点的に取り組んだ単元は三つで、5 領域に分けて取り組むため各領域の評価資料は多くない。重点単元ごとに自己調整に対する評価を記録しておくことが必要である。また次年度の観点別評価の実施に向けて、評価方法の指標づくりについて、今後教科で更に協議を重ねる必要がある。

2 自律的学習への支援ツールとしてのハイブリッドポートフォリオの有用性

本研究では Class Notebook を用いて作業ポートフォリオと評価ポートフォリオの二つを作成した。Class Notebook には授業での使用教材すべてを保存することができ、各生徒が自分の課題に合わせて学習に取り組めるように作成した。当該クラスの現段階での英語表現における目標は、「生徒が翻訳機能に頼らず自分の意見を英語で表現すること」と設定しており、資料を活用すれば英文が出来上がるように構成した。

従来のファイルと比較して Class Notebook の活用について尋ねたアンケート（27 名中 23 名回答）では、多くの生徒がその利便性について評価している（図 9）。学習資料は本単元だけではなく、生徒の英語を書く活動に役立つものであってほしいと願い作成してきた。多くの生徒が家庭

で、そして次年度も利用できそうだと感じており、Class Notebook の活用は主体的な学習への支援ツールとして適していると考えます。また、「今回のパフォーマンス課題に取り組む際に Class Notebook は役に立ったか」という問いに対して全員が「役に立った」と答えており、Class Notebook は「書く」活動に対し有効的な学習支援ツールである。

Class Notebook を活用することで、作業ポートフォリオだけではなく評価ポートフォリオを作成することもできる（図 10）。複数の評価シート RoMS に生徒が記入した学びの記録を、A B C—Z を用いて画像ファイルにし各自の生徒が自分の「あなたの学習の記録」セクションに貼り付けていく。この作業を通してそれぞれの生徒が単元開始から終了時までの学びを振り返り、学びを実感し自己効力感へとつながると考える。学習後のアンケートでも「英語を書くことに対して自信ができましたか」という問いに 14% の生徒が「かなり自信がついた」、82% の生徒が「少し自信がついた」と答えている。この自己効力感が自己調整学習において重要であり、次の学びへと向かう動機付けとなるはずである。

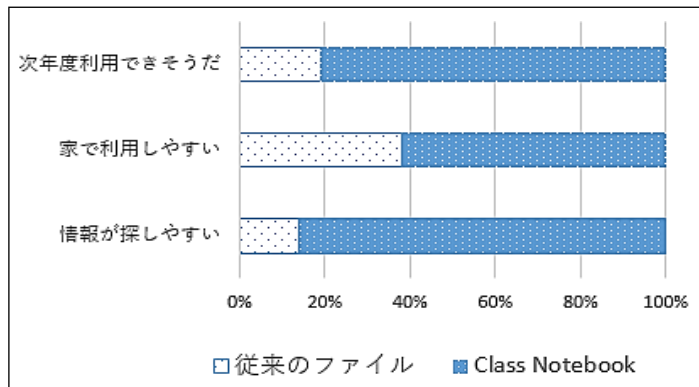


図 9 Class Notebook 利便性に関するアンケート結果

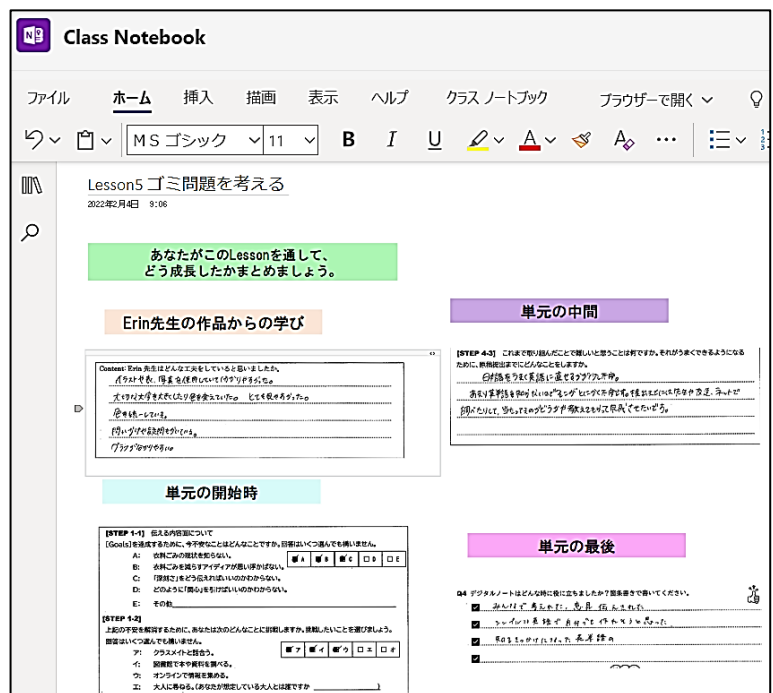


図 10 Class Notebook 中の評価ポートフォリオ（生徒 B）

V 成果と課題

1 成果

- (1) 外国語学習では I C T を活用した多くの実践が行われているが、A B C—Z と Class Notebook を指導や評価への改善ツールとして試行することができた。
- (2) 単元に限定された授業ではなく、英語での発信活動を支援することに配慮した授業の在り方について考え、自律的学習の支援ツールとして Class Notebook を活用することができた。
- (3) 「初めて自分の力で英文を書いた」と感想を述べている生徒や次の書く課題でも自分の力で英語を書いてみたいと多くの生徒が答えるなど、研究の取組が生徒の動機付けにつながった。

2 課題

- (1) I C T ツールの利用に際し使用端末によって、表示内容が異なり生徒が混乱してしまうなど、授業での I C T 利用については指導の工夫が必要である。
- (2) 今回 Class Notebook で作成した生徒個人の学習内容が次年度、また卒業後も活用できるように継続した指導や活用方法の工夫が必要である。
- (3) 定期考査の内容の検討やパフォーマンス課題の内容など、評価に関しては教科全体での共通理解と共通の評価方法が求められる。今後教科全体での協議を重ね統一を図りたい。

〈参考文献〉

- 田村学著 2021 『学習評価』 東洋館出版
- 上山晋平著 2020 『ニガテな生徒もどんどん書き出す！中学・高校英語 ライティング指導』 学陽書房
- 清田洋一編 2017 『英語学習ポートフォリオの理論と実践』 自立した学習者をめざして』 くろしお出版
- バリー・J. ジーマン編 2014 『自己調整学習ハンドブック』 北大路書房
- 峯石緑著 2010 「成長する英語学習者 学習者要因と自立学習」『英語教育学大系 第6巻』 大修館書店

〈参考 WEB サイト〉

- 文部科学省 2018 「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf（最終閲覧 2022年2月）
- 国立教育政策研究所 2021 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 外国語 高等学校編』
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_gaikokugo.pdf（最終閲覧 2022年1月）
- ゼッタリンクス 2011-2022 「Answer Box Creator 手作りワードでデジタルテストをはじめよう！」
<https://www.zettalinx.co.jp/products/abc/>（最終閲覧 2021年12月）
- 河合塾 Kei-Net Guideline 7・8月号 2020 「変わる高校教育 『主体的に学習に取り組む態度』の評価 ～自己調整学習に注目して～」 Part1 概説 九州大学 伊藤崇達准教授
<https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/20/0708/kawaru.pdf>（最終閲覧 2021年11月）
- 文部科学省 2019 「教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415602_1_1_1.pdf（最終閲覧 2021年11月）
- 日本英語検定協会 英語教育研修センター 2004 「中学校選択英語科のライティング学習における教授ツールとしての簡略ポートフォリオの効果に関する事例研究」
https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol16/vol_16_p87-p102.pdf（最終閲覧 2021年11月）
- ベネッセ教育総合研究所 2013 「VIEW21 中学版バックナンバー 2013年度 Vol.3 【特集】1人で学べる生徒を育てる」
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/chu201303_toku07.pdf（最終閲覧 2021年11月）

〈注釈〉

- 注 i 「学習評価に関する参考資料」で提示されている振り返りシートは My Record of Study と記載されているが、本研究では評価シート Record of My Study と記載